

ストレス社会と 精神神経科

大阪鉄道病院 精神神経科部長
江村 成就



世の中がグローバル化し24時間型社会となる中で、人々のストレスは増大するばかりです。気分が優れない、眠れないといった訴えだけでなく、認知症への対処やがん患者さんへの心のサポートなど精神科医療に求められる役割もずいぶんと様変わりしてきました。

当院精神神経科でもこのような状況に対応すべく、診察の予約制を導入し円滑なサポートが行えるように取り組んでおります。診療スタッフは常勤の江村を中心に、非常勤の齊籐和彦医師、森本一成医師のお二方の協力を仰ぎながら日々の診療に対応しております。診療の主な対象疾患は、うつ病やパニック障害、不安障害が中心となります。また認知症に関連する周辺症状への対処や、総合病院精神科の役割として入院中の患者さんへの不眠や不安への対応、がん患者さんの痛みや抑うつ症状などへの対応を行っております。また、日本睡眠学会睡眠医療認定医としてレストレスレッグス症候群の治療や治験に取り組んでいます。

精神科というとこれまでは近寄りがたいイメージがあったかと思いますが、心の病を患う人の添え木になることができればと考えております。



画像診断センター 《放射線部門》

一般撮影

胸部・腹部撮影をはじめ、脊椎や関節など骨格系の撮影も含めた多様な検査部位の撮影を行い、4室撮影室がありCRシステムにより撮影を行っております。内3室はベッド昇降を行えるため患者さんの撮影台への乗り降りも容易に行えるようになっております。



マンモグラフィ

乳房のX線検査で、乳房を上下、斜めの2方向から撮影します。乳がんの早期発見および、治療法を決めるためにも必要な検査です。高品質な画像を提供するため、スタッフ一同精度管理に努めております。



CT室

高速撮影、高分解能撮影のいずれにも対応できる多列CT装置を、普段の予約検査をはじめ緊急検査でもフル稼働しています。またワークステーションを用いて3D処理など画像解析にも力を入れています。造影剤使用時は2重のチェック項目をもちいて安全には万全の配慮をして検査を行っています。

MR室

MRIは放射線を使用しないため、放射線被ばくがありません。さらに軟骨や筋肉、靭帯などの軟部組織は一般的にX線で評価できないため、腰椎椎間板ヘルニアや靭帯損傷、骨軟部腫瘍など骨以外の異常の評価にすぐれています。脳梗塞超急性期では拡散強調画像が、一般にCTより早期に病変を見つけることができます。





アンギオ検査(血管造影検査)

X線透視像を見ながら、カテーテル(細い管)やガイドワイヤ等を用いて、できる限り体に傷を残さず、狭窄している血管の拡張、出血している血管の止血および、がんの治療等を選択的に行います。

心臓カテーテル検査室

心臓カテーテル検査室は、大容量型X線2方向同時撮影装置、血管内エコー、動画ネットワーク等を組み合わせ、年間検査件数500例(治療80例)を行っております。システムのみならず、検査室スタッフがチームを組んで、安全で質の高い心の通った検査治療を実践しております。



X線テレビ室

X線テレビは3台あり、どれもデジタルシステムを採用しており、これまでより大幅に少ないX線量で、的確に写し出せます。

患者さんが動かずに寝台に寝たまま、あらゆる方向からの撮影が可能で、わずかな病変も見逃すことはありません。



核医学検査室

現在、全国に374名しか認定されていない核医学専門認定技師が在籍し、最先端で質の高い検査技術を提供することができます。また、GE社製の最短時間で安全正確に撮像できる装置を使用しているため、安心して検査を受けていただけます。

放射線治療室(リニアック)

リニアックとは、高エネルギーの放射線(X線・電子線)を使って病気の治療をする装置のことです。

当院では外部照射法という方法で、放射線の治療計画をたてて体の外から病変部だけに放射線を照射して治療します。

安心して治療を受けていただけるよう、スタッフ一同努めています。



在宅医療での「阿倍野区医師会」、 「阿倍野区医師会訪問看護ステーション」と 「大阪鉄道病院」の連携



阿倍野区医師会



大阪鉄道病院



大阪市阿倍野区は、天王寺を中心としたターミナルの商業地区と閑静な住宅地区からなり約11万人が住んでいます。

阿倍野区医師会には160の医療機関が所属し、約40の医療機関が地域の在宅医療に寄与しています。

阿倍野区医師会訪問看護ステーションは創設されて13年を経過し、月間約100人が利用されています。

区内には大学病院、地域中核病院としての大阪鉄道病院の他に4病院がありますが、中でも大阪鉄道病院と阿倍野区医師会、阿倍野区医師会訪問看護ステーションの連携は極めて密接です。

このため、大阪鉄道病院の医療福祉相談室から、かかりつけ医のみならず、直接、阿倍野区医師会訪問看護ステーションに、退院後の在宅医療に関する相談があります。

平成18年～21年の間に、阿倍野区医師会訪問看護ステーションが、かかりつけ医とともに退院後の訪問看護を直接行った20名（男性14名、女性6名、平均年齢77歳）について、調べてみました。

訪問看護ステーションの初回訪問までの病院での入院期間は平均75日間、疾患は、がん11名、脳卒中2名、糖尿病とその合併症2名、褥瘡2名（大腿部と下肢）、その他3名でした。

その後の経過は、在宅医療・訪問看護を継続している利用者は6名、お亡くなりになった方9名（自宅4名、病院5名）、転院2名、軽快し訪問終了2名、介護施設への入所1名でした。

いずれの場合もお互いの密接な情報提供により、円滑に入院から在宅医療へと移行できました。

今後も、地域中核病院の大阪鉄道病院（地域医療連絡室、医療福祉相談室）と阿倍野区医師会のかかりつけ医・訪問看護ステーションが、ご利用者・ご家族にとって適切な医療・ケアを提供できるように緊密に連携・協力し、治療や介護方針を相互に確認し合いながら、在宅医療への共通認識を大切にしていきます。

※本文は、日本プライマリーケア学会第23回近畿地方会で阿倍野区医師会（講演者：杉本浩一先生）、同訪問看護ステーション、大阪鉄道病院により共同発表された内容をもとに編集しております。